海の色と思い出の歌

紫藤雪雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
海の色と思い出の歌

【Ｎコード】
Ｎ４４２８Ｅ

【作者名】
紫藤雪雫

【あらすじ】
これは人魚姫と人間との切なくとも優しい恋の物語

0話　前奏曲

そう、出会いは突然だった

海の色と思い出の歌　～前奏曲～

ここは海の中人魚の世界
「姫様なりません！！人界に出るなど！！」
「そうですよ、人間など恐ろしいだけです」
「いや！行く！分かってくれないなら勝手に行くもん」
ヒュー
「ハ～まったく」
「ここが人が住む世界か～」
「ん、なんかキラキラ光ってる行ってみよう！」

今日は両親知り合いの人の舟でパーティが行われていた
「ちゃんと挨拶するのよ詩音」
「はい、母様」

「それですね～」
つまらない
外にでも出よう
あ、月が出てる
そのとき水面の水が跳ねた
それと同時に女の子の声が聞こえた
詩音は海面に向かって叫んだ
「誰か居るの！！」

その直後水面から女の子が出てきた
「驚かないの？」
「え、全然」
むしろすっごくかわいいと思った
「よかった～」
「何が？」
「うんん、何でもないよ」
「あ、そういえば名前なって言うの？私は小波」
「僕は詩音だよよろしく」
「こんなところで何やっているの？」
「つまんないから」
「楽しくないの？」
「うん」
「なら、私が歌を歌ってあげる！！」
そう言って小波は歌い始めた
ラ～ララ
「・・・・」
「どうかな？下手だったかな」
「う、うんんすごく上手だよもっと歌ってよ！小波」
「いいよ」
それから二人は時間が許す限り歌った
しかし船は戻ろうとしていた
「あ、戻らないと」
「そっか、また明日会える？」
「うん！会おうあの岬で」
「うん、分かった！！」
これが人魚と人間の出会いだった

次の日
「え、海の中で女の子に会った」

「うん！すごく可愛い子だった」
詩音は昨日会ったことを母親に話した
「何を言うのそれは人魚よ！危険だから近づいちゃ駄目よ！」
人魚？
詩音の中ではまだ理解だ来ていなった
でも、小波に逢いたくて家を飛び出した

「まだかな～」
「ごめん遅くなって」
「うんん良いよ」
そのときだった
小波の足が魚のようになっていたことを・・・
そして理解ができたこれが人魚だと
「うわっ！！こ、怖いよね、私のこと・・」
「いや、怖くないよ」
「ホント？」
「ホントだよ、だからまた歌を聞かせて」
「うん！！」

それから毎日のように岬で会い二人で歌った
しかし、1週間経った頃だった
二人を引き裂く出来事が起きた

「え、もう会えないの？」
「引っ越すだ」
「でも、またいつか会おう」
「ホントに会える？」
「うん、絶対だから小波にこれを上げる」
そう言って手のひらに出したのは真珠だった
「これ、良いのもらっても？」

「うん良いよこれは『母様が大切な人ができた時に渡しなさいって』
」
「小波僕の大切な人だから」
「ありがとう！！」
「あ、私もこれあげるね」
詩音の手のひらに置かれたのは小波自身の鱗だった
「これは私たちの間でわ約束の証なんだよ」
「ありがと大切にするね」
「もう行かないと、さようなら」
タッタ
「詩音！！、また逢おうね！！約束」
「うん！！絶対に」

こうして二人は別れた
また、逢うこと約束して

始めまして紫藤雪雫と言います！
初めての連載小説ですが頑張りたいと思います！

0話　前奏曲（後書き）

ヘボ小説読んでいただいてありがとごうざいます！！

1話　～そう、出会いは突然だった～

再会は偶然だったのか、それとも・・・

海の色と思い出の歌そう、～出会いは突然だった～

私は今喧嘩をしている
その理由は・・・
ほんの数時間前にさかのぼる

「え、今何ていいましたかな？姫様？」
う、顔が怖いよルジア・・でも！！
「だから、さっきから言ってるでしょう！」
「人界で暮らしたいって！」
「そんなもの駄目です許可できません！！」
「姫様はもうお忘れになったのですか？6年前のことを」
「6年前もそう言って人界に出っていったでしょうが！」
う、確かにそうだけど
忘れてない、忘れる事が出来ない、だから行きたいの
だって今なら会える気がするから
「だって今なら会えると思うの！！」
あの時は約束だけで会えるなって思っていなかった
でも、そんな気がするの

「だから、今行かなくちゃいけないの！！」
「～～駄目なももはだめです！！」
そうして喧嘩は２０分も続いていた

「まあまあ、お待ちなさいな」
「「あ、長老様！！」」
長老様は人魚の世界で姫の次に権力をもっている
「皆さん小波姫のしたいようにさせましょう」
「しかし・・」
「この子にも恋とゆうのをさせてあげましょう」
「え！良いの！！やったー！ありがとう」
「いえいえ、でも泡になっても後悔しませんね？」
「はい！！」
「～～長老様も良いってもこだし分かりました」
「ただし条件を出します、良いですね？」
「はい、守ります！！」
出された条件は二つ
一つ目は汐を連れていくこと
汐は小波の御付きの男の子でおさなじみ
二つ目は人魚とばれた時にはそっこで帰えってくること
私は長老様にもらった薬をもらって人間になった
私は人間の『唯砂野小波』になった

「ごめんね私のために巻き添えくらって」
「いいですよ、気にしていません」
しばらく歩いていると校舎らしきものが見えてきた
”海夜乃学園”
二人が通うことのなる学校
「ここが人界か～あ！あそこでしょ、私たちが通う学校！！」
「そうです」

二人は校門を通り入学式が行われる体育館へ行った
「わ～広い！すごいね！」
と小波が騒いでいると
先生らしき人が現れ
「静かにしてください今から海夜乃学園第７０回入学式を始めます」
と言った
「まずは校長先生のお話です」
それから校長の長い話などが続き先生が次は『新入生代表の言葉です』と続けた
「でわ、代表日向詩音君」
「はい！」
小波は祭壇へ登っていく人影をじーと見ていた
しばらく見ていると汐が声をかけた「どうかしたのか？」
「汐見つけたの！！私の大切な人を！！」
小波の大切な人の再会の先には何が待っているのだろう

1話　～そう、出会いは突然だった～（後書き）

ええっとこんなヘボ小説を読んでいただいてありがとうございます
もし、誤解字や感想があったらぜひ書いてください

2話　忘れられた組曲

それは空白の『時間』を埋めるようだった

海の色と思い出の歌　忘れされた組曲

入学式の後小波と汐は自分たちのクラスに向かっていた

ガラ

教室に入るともう既に体育館から帰ってきた生徒が集まっていた

「えっと席は～」

小波は座席表を見ながら席を確かめた

「あ！あそこだ！」

席は日が良く当たる窓側の後ろから2番目だった

そして二人は自分の席に座った

すると小波の席に二人の少女が近寄ってきて声をかけた

「ねぇ、名前なんて言うの？私は美里來、よろしくね」

「私は真斗由衣」

「唯砂野小波だよ！こちらこそよろしく！」

「小波って読んで良い？」

「うん、いいよ　私も來って呼ぶね」

「いいよ～あ、由衣ちゃんのことも呼び捨てでいいから」

「分かった」

こうして3人はすぐに仲良くなっていった

3人で話し込んでいると一人の生徒が教室に入ってきた

と同時にきゃーという歓声が聞こえてきた

そのは入ってきた生徒は入学式のとき生徒代表を務めていた
『日向詩音』だった「あ！」
突然小波がが大き声を出したので二人驚いて小波を見た
「ど、どうしたの突然大き声出して？」
來の言葉を無視して小波は詩音に飛びついた
「詩音くん！！会いたかったよー！」
しかし、詩音の口から出た言葉は残酷なセリフだった
「君、誰？どっかで会った？」
「・・・え、覚えてない、私だよ小波６年前にまた会おうって約束したじゃか」
「さ～全然覚えてないな」
そう、詩音は小波と別れたあと『人魚』と会っていたとゆう事実を忘れてしまっていた
小波の存在さえも

失われて約束の時間
また、あの時のように戻れると思っていた
しかし、再会は最悪の形になってしまった

2話　忘れられた組曲（後書き）

ここまで読んでくださってありがとございます

3話　真夜中の決意

その日はどうやって帰ったのかも覚えてなかった

海の色と思い出の歌　3話　真夜中の決意

「ただいま」
「あ、おかえり」
「何かあったのですか？顔色悪いですよ？」
え、私そんなにひどい顔しているのでも心配かけたくない
汐には何かと迷惑かけているし
それにこれは私の問題だから
「うんん、何でもないよ」
「いえ、何か隠してるでしょ？」
「それに嘘ついてる時に首筋触る癖でてますよ」

え、また出てた
う、汐には嘘つけないな
「聞いてくれる？」
「良いですよ姫様」
「ねぇ、今は姫様って言うのやめて」
「今は義理の兄弟って設定でしょ」
「あ！そうでしたね」
「実は・・・」
小波は今日あった事をすべて話した

「そうでしたか」
全てを聞き終えた汐から返ってきた言葉はとても無情だった
「なら諦めますか？」
「え、だってもう向こうは私のこと忘れてんだよ」
「今さら私のこと思い出しって言っても無理だよ」
もう諦めていた
詩音君は私のことを忘れている
だからもう会わない方がいい
もともと叶わないことだったんだよ
そう思っているうちに涙が流れてきた
その時だった
「小波はこれで終わってしまっていいんですか？」
え？
「忘れられていても、どんな悲しい結末が待っていても」
「後悔しないと決めたんでしょ？」
「ならこんなことで諦めてしまったらそれこそ」
「今までの事が総て無駄になってしまんじゃないでしょか？」
そうだ私はなんてバカだったんだろう・・・
私は詩音君に逢いたくてここまで来たんだ
汐の言うとおりだここで諦めたら私は本当に後悔してしまうかもしれない
ここで立ち止まっていたらダメなんだ
だからどんなことが有っても前に進まなきゃ
「汐、私もう一度頑張ってみる！！」
「どんなことが有っても諦めない！！」
「うん、その域です小波」

小波は一つの決意をした
それは詩音に自分のこと思い出してもらうことだった

3話　真夜中の決意（後書き）

こんなヘボ小説読んでくださいましてありがとうございます

4話　林間教室と秘密の出来事・前篇

初めての林間学校はドキドキとハラハラの連続でした

海の色と思い出の歌　４話　林間教室と秘密の出来事・前篇

「ふぁ～」
昨日の事があって小波はあまり眠れていなかった
でも昨日決めたことは嘘ではない
絶対に後悔しないと決めたから
それでも睡魔には勝てていなかった
「小波、小波」
その時上空から声が聞こえていた
「ふぇ、何・・・」
「何じゃないよ」
「こりゃ完全に寝ぼけてるね」
声の主は真斗由衣と美里來だった
「小波話ちゃんと聞いてた？」
「話？何のこと？」
「ああもう、もう一回言うね林間教室の班決め」
「男の子３人女の子づつの６人班だから」
「私たち３人で同じ班になろうって話だよ」
そこまで言われて小波は思い出した
今は３時間目の授業中だということを
「あ！そういえばそうだった」

「は～やっと思い出したか」
「で、良いよね？同じ班で？」
「うん！！いいよ」
「じゃ、女子は決まったとして男子は・・・」
と由衣が考えていると、後ろから明るいで声をかけられた
「じゃ、俺らと一緒の班になる？」
声をかけてきたのは糸乃和木だった
「え、良いの？」
「ああ、良いぜ！な、琉胡、詩音？」
「俺もかまはない」
「俺も！！來と一緒になれるし！！」
ゴンッ！！
「いって！！」
「余計なことを言わんでよろしい！！」
「そんな釣れないこと言わないで～」
「でもこれで班決まったね」
そんなやり取りを聞いていた小波に和木から声をかけられた
「よかったね唯砂野さん、詩音と一緒になれて！」
「え、ああ！！そっか同じ班か～」
「好きなんでしょう詩音事が」
「／／／うんあ、ででもなんで好きなの知っているの？」
「そりゃもう入学式のときの事で」
「そんなに分かりやすかったの？」
「ああ、だってあんだけ大胆のことをしていたら気づくでしょ」
そんなにすごかったんだ
すごく恥ずかしい～／／／／
そしてとっさに顔を両手で隠した
でも両手で隠した小波の顔の下はリンゴのように真っ赤だろう
「そんなぁー」
「まぁ、みんなには黙っておいておくよ」

「ありがと」

放課後の帰り道

「ふふ～」

小波はその日、鼻歌を歌いながらご機嫌で帰って行った

林間教室を楽しみにしながら

４話　林間教室と秘密の出来事・前篇（後書き）

下手な小説ですがここまで読んでくださってありがとうございます！！

5話　～林間教室と秘密の出来事・中篇～

この日は二人ともドタバタだった

海の色と思い出の歌　～林間教室と秘密の出来事・中篇～

「おはよー」
「「おはよ」」
「遅かったね、小波」
「寝坊しちゃった～」
「あはは小波らしい」
その時向こうから先生の声がしたので3人は集合場所へ行った
バスへ乗り込んだ
そして一時間ほどして目的地に着いた

「んー空気いいね！！」
「そうだね！！」
「こら、お前ら早く並べ！！」
「「「はい」」」

「説明はこれくらいなじゃ、各自荷物を持って部屋へ行け荷物を置いたら」
「講堂でレクリイショーだから遅れるなよそれでは解散！！」
その言葉とともに皆はそれぞれの部屋へ行った

「じゃ、後でな！！」
「うん」
部屋の前に着き詩音君たちと別れた
荷物を部屋に置いてから講堂に行ってレクリイショーンをやった
初めてだったからとっても楽しかった

夕食を食べてお風呂に入った
そして詩音君たちを交えて明日のことを話した
「海楽しみだね！」
「そうだね、小波！！」
「う、うん」
「何その歯切れの悪い返事は～」
「そうだよ唯砂野は楽しみじゃないのかよ」
「い、いやそうじゃなくて」
う～ホントは海は大好きだよ
だって人魚だし
でも、海に入ると尾びれと背びれ出ちゃう
「おい、唯砂野？」
「え？あ詩音君！！」
「どうした？ぼ～としてたけど大丈夫か？」
「いや大丈夫！」
「そう、なら良い」
その時琉胡が話しかけてきた
「なあ、もしかして唯砂野さん泳げないの？」
え、えっとホントはすごく泳ぐの得意だけど
ここはばれるのは嫌だしそう結うことにしておこう
「う、うんそうなんだ」
「え！そうだった！なら泳ぎ方教えてあげる！！ね、由衣？」
「うん、私たちに任せな！！」

「あ、ありがとう、でも水着持って来てないんだ」
「うそー」
「ざんねん」
「でも、ホントにありがとう！」
二人はがっかりしながらも違う話題を出し話し始めた

そして皆でいろんな話題で盛り上がっていたら消灯時間が来た
「じゃ、俺らも戻るわ」
「うん、おやすみ」
「おやすみ來！！」
「お、おやすみ詩音君！」
「おやすみ唯砂野」

その日小波は明日を起こる事件など知らずに深い眠りについた

5話　～林間教室と秘密の出来事・中篇～（後書き）

ええっと毎回ながらヘボ小説を読んでもらってありがとうございます！！

6話　～林間教室と秘密の出来事・後篇～

茜色の空が包む海の下で起きた二人だけの秘密

海の色と思い出の歌　～林間教室と秘密の出来事・後篇～

2日目の朝講堂で先生が今日の予定を発表した

「今日の日程を言うぞ！午前中は海での自由行動でお昼は皆でカレーを作るぞ！分かったな」

『はい』

その時小波はどこか違うことを考えていた

どうすれば詩音が自分のことを思い出してくれるのかを

（う～んどうすれば）

「小波、小波！」

その時、声が頭の上から降ってきた

「ぇ、」

「え、じゃない！みんなもういちゃってるよ！」

「うそ！本当だ」

「もー小波たっら何度も声かけたんだよ」

「ごめん來」

「ほら、行くよ！！由衣も待ってるし」

「うん」

「うわ～すごいね！來」
「そうだね！さっそく泳ごう！」
「うん」
そう言って来と由衣は海に入っていった
その様子を見ていた和木は「俺も！」と言って二人に着いていき
琉胡も來を口説くと宣言し後をついっていった
もっとも來には相手にされていないが・・・

四人が海で遊んでいること小波は一人砂辺に建てられたビーチパラソルの下にいた
「いいな～私も泳ぎたいな～まあ、入った時点で人魚になるから無理か」
とぼやいていると
「おい」と声をかれられた
その声の方向に目を向けると詩音が居た
「食べるか？」
そうして差し出されたのはかき氷だった
「わ～おいしそう！ありがとう」
ぱっく
ぱっく
キーン
「ん～頭いた！でもおいしい！」
「よかった」
「そういえば、詩音君は海行かないの？」
「俺は別にいい。それにおまえ一人じゃつまらないだろ」

（え、心配してくれたんだ）
「なあ、この後堤防のほうへ行ってみないか？」
「それって・・・」
「そこで一人でいるよりもいいだろ」

「うん！行く詩音君大好き！！」
ガッバ
「おい、抱きつくな重たい」
「えーだっ・・」
ピッピー
「あ、笛が鳴った戻るぞ」
「うん！」
そのとき先生の集合の笛が鳴ったので二人は一度皆の元に戻っていった
その後お昼をみんなで作ったカレーを食べながら
來・由衣・小波・琉胡・和木・詩音は午後の事を話していた
「この後また海入ろう」
「うんいいね！！」
「小波はどうするの？」
「ん、私は詩音君とデート！！」
「お！デートですか～いいですね」
「違う、堤防のほうに行くだけだ」
「な～んだ、でも楽しんできてね」
「うん」

二人は皆の元を離れて堤防に行った
少しずつ堤防の上に登っててっぺんまで登った
「うわ～スゴイ！！終わりが見えないよ！！」
「そうだな、海はずっと先の方まで続いているからな」
そしていつしか3時半過ぎになっていた
「もうそろそろ戻るか」
「そうだね」
こうして二人は空が茜色に染まっていく中で足場の悪い岩場を歩いていた
ガッツ

バッタ
大きな音立てて小波がこけた
「イッタ～」
そうして小波がお尻をさすているっと
「大丈夫か？お前ってやっぱドジだな」
そう言って詩音は手を差し出した
「うん」
小波は立ち上がろうとしたが
「イタ！」
「ん、足くじいたのか？って血が出てる手当てするからそこに座れ」
「あ、ありがと」
そう言って小波は大きな岩の上に座った
「サンダルなんかで来るから」
「うん、ごめん」
「いいから足出せ」
っと詩音に小波が手当てをしてもらっていたその時だった
ザバーンと大きな波が二人の方まで襲ってきた
一瞬のことだったので二人は対処できずに全身ずぶぬれになった
「うわー濡れちまった、小波は大丈夫か…！！お前その格好・・・」
「ん、あ！！見られた」
そう、あの一瞬で小波は海水をかぶってしまったため人魚に戻ってしまったのだ
「う、そだろ小波が人魚だ何って」
「えっと隠しってごめん見られちゃったね・・怖いよね」
ばれちゃった・・しかも一番好きな人に
もうタイムリミットか早かったなもっと一緒に居たかったでも
恐ろしいよね怖いよねクラスメイトが人魚だ何って
小波は足早に約束の通りに海に戻ろうとしたその時だった
突然右手をつかまれた
掴んだのは詩音君だった

「行くな、たしかにびっくりはしたけどお前こと嫌いになんてなってないよ」
「ほ、ほんとに」
「ああ、それにきれいだよ人魚のお前も」
「嘘怖くないの？」
「怖くないよ」
「よかった、嫌われちゃったかと思った」
「大丈夫」
「あのね、このこと秘密にしててほしいんだ」
「いいよ二人だけ秘密だ」
「あいがとう」

茜色に染まってっていく夕日の中で幼いころに毎日のようあの岬で
に交わした
二人の約束のように
今日また二人の間に小さな秘密が出来た

6話　～林間教室と秘密の出来事・後篇～（後書き）

林間教室編これにて終了です
次からは新展開に移ります
此処まで読んでくださった皆様ありがとうございます

6，5話　姫貴の言葉　―プリンシアヴィプロメッサー（前書き）

今回は番外で小波と汐音の過去編です

6，5話　姫貴の言葉　ープリンシアヴイプロメッサー

あなたの為に俺の全てを捧げます

6，5話　姫貴の言葉　ープリンシアヴイプロメッサー

林間教室から1週間たったある日の日曜日の1時
汐音の部屋にて
「あれ？このへんだと思ったんだけどな？」
ガチャ扉の開く音が開き外から小波が入ってきた
「汐音ー、何してるの？」
「ん、小波ちょっと探し物をしていまして」
「ふ～んそれでこのありさまなの？」
そう言って小波が指さした方向には箪笥から引っ張り出したと思われる
ダンボールの数々が放り出されていた
「はは、そうなんです」
「ところで何を探してるの？」
「時計を」
「時計？」
「はい、昔大切な方戴いたものなんです」
「そうなんだ、でも、何でしまってたの？」
「引越しの時の荷物整理の時に要らないものと一緒にしまちゃって」
「そのまま今まで忘れちゃってたんです」
「珍しいね、汐音がそんな大事なこと忘れるなんて」
「よし！！私も手伝うよ時計探し二人の方が効率いいでしょ」

「ありがとう小波」
それから約1時間二人で箪笥の中から段ボールを出しては開けてを繰り返すが
出てくるのはガラクタばかりだった
「はあー無いねてか汐音相変わらずいっぱいあるねガラクタ」
「いえ！ガラクタではありませんよ、立派なコレクションです！」
「・・そう、」
汐音がガラクタではなくコレクションだと言い張っているもの達はみな
海に居た時に漂流してきた小さな小瓶やプルタブや王冠など果たして必要なのか分からないものばかりである
探しているうちに箱が残り一個となった
「これで最後か開けるね」
「ああ」
小波は段ボールのガムテープ外して中身をのぞき見た
と、奥の方に部屋の明かりに反射したものが見えたのでそれに手を伸ばして
中から出してみた
「汐音、探してたのはこれ？」
「！！これです、よかった見つかって」
「綺麗な時計だね汐音」
「はい、しょうでしょう」
「そういえばその時計って誰から貰ったの？大切な人って？」
「え？覚えてないんですか？」
「ふえ、何を」
「・・・いえ覚えてないんですか、これは姫様がくれたものなんですよ」
「姫？へ～どんな人だったの？気になる！教えて」
「・・・」
（本当に忘れてるですね）

「ええいいですよ、少し長くなりますけどいいですか」
「うん！いいよ聞かせて！」
「あれは・・・・
7年前・人魚の王国内王宮
「姫様！！姫様」
「また、王宮の外に！」
「まったく！あのじゃじゃ馬姫は！！」

ところ変わって人魚街
ここは人魚たちが店を作って商売をしたり誠と呼ばれる家を建てて住んでいる
「ふう～脱出成功！！あんなのに毎回ひっかかるなんて」
と独り言を言いながら歩いていると魚屋のおじさん話しかけられた
「お！姫じゃないか？」
「あ、魚屋のおじさん　こんにちわ」
「相変わらず礼儀正しいな姫は！今日も一人か」
「うん！」
「そうか、でもあんまり城のもんを困らすなよ」
「うん、わかっ「姫様！！」
「げ！！その声は・・・」
「やっと見つけましたよ姫様」
「汐音、き、今日は早いね？」
「ええ、これを使って探したので」
「それって・・・やられた！！今日も絶対見つかんないと思ったのに」
汐音が首から下げてる貝の中から出したのは呼蟲とよばれる生き物
呼蟲は仲間を独特の音で呼び合う習性をもっているためそれを利用して
片方に呼蟲を持たせておけばもう一匹は仲間探すために音発する
なので片方もそれに応じて音を出すため二つの音が反響し合うの人

を探すとき
におおいに役にたつ
特に海の中は広いので何かあったときの為に呼蟲を一人一匹持っている
「さあ、城に帰りますよ姫様」
「う、うぅちぇはいはい帰ったらいいんでしょ帰ったら！！」
「はいは一回ですよ、でも聞きわけが良いのはいいことです」
そんな一部始終を見ていた魚屋のおじさんは小波を慰めるように小魚のフライをくれた
「まあまあ、城に帰ってこれでも食いな」
「ん、小魚のフライだ！！ありがとう」
「どういたしまて」
「さあ、帰りますよ姫様」
「うん」
「ばいばいおじさん」
「お！また明日」
こうして二人は魚屋を後にして城へ続く道を泳いでいた
「はあ、まったく王宮を抜け出すのもほどほどにしてくださいね」
「だって街の方が勉強よりも楽！！」
「だからってお付きもつけないで抜け出さないで下さい、先生もお怒りですよ」
「でも、あの歴史学の先生嫌い」
「だからって仮病を使ったり「あ！あそこ、新しいお店出来てる！行ってみよ汐音」
「って聞いてるんですか姫様！！て、もういないまったく」
そうして小波のを後を追いかける汐音だった
「おそい！！」
「姫様が早いだけだけです、でここは」
「時計屋さん！！」
「良い品が集まってますね」

人魚は基本的に時計は持たない理由は二つ
一つは海では日が在る時間を朝、日がない時間を夜としているため
もう一つは部品を陸や深海から拾ってこないといけないのと作れる
人が少ないため
「うんどれもいいのばかり・・ねえ、これ汐音に似合いそう！！」
「どれ、あ、これですか？」
小波がガラス越しに指さしたのは金色の懐中時計
「たしかに使う分にはもうし文無いですが高いですよ、ですから私
は良いです」
「そんなこと言わすにさあ！おかねは心配しないで私から父様に言
っとくから」
「ですがー」
「良いの！！私がプレゼントしたいの」
「それにいつも迷惑かけてるお礼」
「・・・」
そう言って小波は汐音に反論を言わせる間もなく店の中には入り
店員に懐中時計の支払いをすませて店から出てきた
ただし代金は国王お持ちだが
「汐音お待たせ！！はいこれ」
「ありがとうございます、大事に使わせてもらいますね」
「うん、どういたしまして」
回想終了

「とゆう事です小波」
「へー姫様に・・・って私が買ってあげたの？自分で忘れてた」
「ええ、でもそれは仕方ないと思いますよその一年後に日向さん逢
ってからずっと小波夢中になってましたから」
「それでか」
「思い出せましたか？」
「うん、買った後の事もあの後父様おかね頼みに行ったこともそれ

と・・・」
「それと？」
／／／そのあとに汐音に言ったことも」
「たしか、『私は貴方が誇れるような姫になると』でしたよね」
「そこまで覚えてたんだ」
「これは小波の宣言でしたからね時期女王としての」
「今思うと言わない方がよかったかな、今でも立派じゃないし」
「いえ、十分立派な女王ですよ小波」
「ならよかった」
「でも、私が忘れてたのに大事にしてくれてたんだ」
「ええ、私の一番の宝物ですから」
「そう、言ってもらえると買ったかいあったかも、ん？」
ふと、小波が壁に掛けてある時計を見ると
「どうかしましたか」
「ってもう5時だ！！」
「あ、本当ですね片付けたら夕食の準備をしましょう」
「うん！！」
こうして二人の長い1日が過ぎっていった

6，5話　姫貴の言葉　―プリンシアヴイプロメッサ―（後書き）

読んでくださってありがとうございます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4428e/

海の色と思い出の歌

2011年10月5日00時33分発行